

書評論文

自己組織性と情報の社会学

——吉田理論・三部作を論ず——

橋爪 大三郎

戦後日本の理論社会学シーンを、文字通りリードしてきた一人である吉田民人氏が、まとまった著作をこれまで公刊していなかったのは意外である。そんな吉田氏の論集が、一九九〇年から翌年にかけて、相次いで出版された。これで、吉田氏の主要な論文ほぼすべてを誰もが容易に読めることになり、学界の財産となったことを大いに喜びたい。

吉田民人氏が学界内でどれほど大きな地位を占めているかについては、いまさら私がのべるまでもない。ここではまず、今回まとまったかたちで読めるようになった氏の著作——これを便宜上、三部作とよぶことにする——をひととおり概観しよう。そのうえで、その論理構成に即して、主だった論点について私の見解をのべることにしたい。これは、吉田氏の全業績（しばしば「吉田理論」とよばれている）を評価するという作業に似てくるかもしれないが、そうした評価は後世の人びとにゆだねるべきことだ。私はただ、同時代の研究者としての吉田氏に対し、率直に自分の疑問をいくつか尋ねただけである。

*

I期の論考で……ミクロ社会学理論の代表的な三レヴェルというべき、行為（1章）・関係（2章）・集団（3章）をめぐって、私なりの一般理論をのべたものである。第4章は、これらの三レヴェルに通底する理論の一般形式を……抽出した論文である（「情と自」iii頁）という。また、〈第5〜7章は……第II期の仕事で……〉〈構造―機能理論の日本的展開〉が、精力的に推し進められた時期に対応している。（「情と自」iv頁）〈第8〜11章は今日にいたる、なお未了の第III期の論考である。……それは、〈情報―資源処理パラダイム〉の個別的テーマへの適用をはかり、そのことを通じて〈自己組織性〉理論の具体的展開を試みた時期である（「情と自」v頁）、と位置づけられている。

さて、三部作にはそれぞれ、著者自身による丁寧な解題（まえがき、はしがき）がついていて、読者に便利である。それを参考に、各冊の構成を確認していこう。

『自己組織性の情報科学』（以下「自の情」と略）は、一九六七年の長大な論文「情報科学の構想——エヴォルーションニストのウィーナー的自然観——」に、一九九〇年の「情報・情報処理・自己組織性」をつけ加えたもの。〈情報科学の構想〉は、一九六二年から一九六九年にかけて培風館から刊行された全6巻のシリーズ『今日の社会心理学』のなかの、第4巻『社会的コミュニケーション』に掲載されたものである。〈「自の情」i頁〉吉田氏によればこの論文こそが、〈研究者としての私の原点〉（「自の情」v頁）であったという。

つぎに、『情報と自己組織性の理論』（以下「情と自」と略）は、〈「情報」と自己組織性〉の主題を核（「情と自」iii頁）にする十一篇の論文を、ほぼ年代順に並べたもの。吉田氏自身の整理によると、〈全体は大きく三つの時期に分けることができる。第1〜4章は……第

これまでに書かれた吉田民人氏の主要な論文は、以上の三部作にほぼ網羅されていると考えてよい。このほかに、〈私の自己組織パラダイムの、現時点での一応の総括的叙述となるものとして、岩波市民セミナーの連続講義「自己組織性とは何か——資源・情報・システム」〉（岩波書店、近刊）（「自と情」xi頁）があるというが、それ抜きでも、吉田理論の本質にふれる議論ができることはたしかである。

*

さて、前後三十年あまりにわたって、多様なテーマをめぐり多彩な方法論を駆使して展開された吉田理論の、全容を要約するのは容易でない。

私が吉田氏の論文を系統的に読むようになったのは、氏が京大から東大に移った一九七五年ごろのことだったろう。当時私は、東大大学院の博士課程に進んだばかりであった。高橋徹教授が周到に「院生諸君はなるべく吉田さんのゼミに出るように」とアドヴァイスしたが、そんな気配りは必要ないくらい、吉田ゼミはたちまちにぎやかなゼミとなった。それは吉田氏が討論を好み、ものごとを徹底的に掘り下げないと気がすまない性分だったからだと思う。論争好きで自由勝手な院生たちに、吉田ゼミは居心地がよかった。

当時、吉田氏は、構造―機能理論の代表的論客の一人とみなされていた。それプラス、独自の情報理論の主唱者というのが、私を含めた院生の受け取りかたであった。吉田氏の回顧によれば（「情と自」はじめ）、そのころ氏は第II期から第III期へと進みつつあったわけだが、そのことを当時の私は知るよしもなかった。以後、吉田氏から直接教え

を受ける機会がなくなったので、私の理解は、どちらかと言えば吉田理論の第II期に偏っている可能性がある。

吉田氏の三部作を通読してみても、やはりまず誰でも感じるのは、ふつうの社会学者の関心の範囲を超えた、情報概念への思い入れの深さである。このことをどこまで社会学にとって本質的と考えるかで、吉田理論のイメージが違ってくるだろう。これを、まず第一の論点としたい。

つぎに、吉田理論の中核である、自己組織性論(あるいは社会学に限定すれば、構造機能理論)の論理構造である。「自由発想と主体選択」を中心概念とする吉田・自己組織性論は、どういう主張なのか。これを第二の論点としたい。

第三には、吉田理論の発展形態である、主体と所有構造の理論である。とりわけ、現象学、日本文化論、フェミニズム、仏教などへの吉田理論の応用は、妥当で有望なものだろうか。最後にこれを、第三の論点としたい。

以上を繰り返しておけば、とりあげたい論点は、(1)汎情報論的視座、(2)自己組織性のロジック、(3)吉田理論の応用問題、この三つである。これらの論点は、吉田理論の発展の三つの時期にほぼ対応している。それらを順に考えることで、吉田理論の全体像が過不足なく浮かびあがるとよいと期待している。

*

そこで第一に、吉田理論を根底で支える情報論的視座について。

吉田理論が一部の人々にとつきにくいのは、吉田氏の独自の言葉づかいもさることながら、氏がベースにしている論理実証主義の伝統が、

想は、単なる分類学ではないかとの批判をしばしば受けてきた(「情と自」Ⅷ頁)のではなからうか。

この点について、吉田氏はこう反論する。(「そもそも理論的営為の革新には、第一に、伝統的な概念による革新的な命題の表現、第二に、革新的な概念による伝統的な命題の表現、第三に、革新的な概念による革新的な命題の表現、という三つのタイプのもものが存在する。このうち第一タイプは社会的にもっとも受容されやすい革新であるが、私は、むしろ第二、第三のタイプの理論的革新を志してきた。新しいカテゴリー体系の構築に比重をかけてきたのである。……自然言語の枠桎に縛られるかぎり、新たな科学的世界像の構築は不可能である(「情と自」Ⅷ頁)

私はこう考える。まず、「三つのタイプ」が存在するという吉田氏の前段の主張は、完全に同意できる。ただ、そのあとがよく分からない。

吉田氏の《理論的革新》は《革新的な命題の表現》にあるのか、それとも《新しいカテゴリー体系の構築》にあるのか。もしも前者だとしたなら、少なくとも第二のタイプの革新(周知の事実を新しい用語で言い換えただけ)は有害無益なはずである。だから吉田氏は、自分の仕事が第二、第三のタイプのどちらなのか、はつきりしてほしい。その上で、第一のタイプをもっと評価するべきだ。伝統的な概念によって革新的な命題が表現できるものなら、それは目新しい用語による誤魔化しが効かないぶんだけ人びとによって棄却される可能性が高く、したがって論理実証主義の指針に照らして、仮説の提示の仕方としてすぐれていると思う。また、このことが不可能であるとして(すなわち、引用した最後の命題を承認したとして)も、それは「自然言語の枠桎に縛られさえしな

わが国の学界に必ずしも十分に受け入れられていないという事情のせいであろう。

吉田氏は「情報科学の構想」の執筆にいたる道筋を回顧して、こうのべている。(「こうした私の道行きの背後には、学生時代から故武田弘道先生の手ほどきで親しんできた論理実証主義にもとづく統一科学(unified science)への関心と、同じく武田先生に導かれた(パースやモリスの記号論)に対する興味があった。これらの土壌のうえに……遺伝情報に関する知識の衝撃が加わり、そして最後にすべてを決定したのは、ノーバート・ウィーナーとの出会いであった。……20代から30代にかけての私の発想にもっとも深い影響を与えたのは……この、情報哲学の祖先ウィーナーであったといわなければならない。)(「自の情」iv頁)吉田理論の全体を貫通する、厳密に分析的な研究態度は、氏の論理実証主義体験に由来すると考えて間違いないだろう。

ところで私も、昔からヴィトゲンシュタインをひもとき、その関係で論理実証主義の著作にも触れてきた。そして、そこから受ける印象と、吉田氏の著作から受ける印象とは、微妙な点で違っているように思う。それはどこから来るのだろうか?

論理実証主義は形而上学を敵視し、厳密で論理整合的で有意義な言語を構築することを目指した。そこは共通している。けれども論理実証主義や、その系統をくむ分析哲学の場合、そのもっとも重要な成果は、命題のレベルで、哲学的な言説を検討するところから生まれている。それに対して吉田氏の仕事はあらかた、用語(もしくは概念)のレベルでのもので、命題のレベルでの仕事は目立たない。それゆえ《私の構

ければ、新たな科学的世界像の構築が可能になる」ことを直ちに意味しないはずである(論理的に同値ではない)。

結局のところ私は、吉田氏が《新しいカテゴリー体系の構築》に情熱を燃やし続ける理由を理解できない。それは、《革新的な命題》を樹立するために、必要でもないし十分でもないように思われる。

*

吉田氏の《新しいカテゴリー体系の構築》がどのように進められているか、もう少し詳しく検討してみよう。

一般に、吉田氏の作業はつぎのような手順を踏む場合が多い。

①独立な二組み(以上)の対立軸をみつける(例:均衡/不均衡、許容/非許容)。

②それらの直積をつくって、可能なカテゴリーを枚挙する(いわゆる田の字型のマスができあがる)。

③それらカテゴリーの上位概念を考えたり、それらカテゴリーの間の関係(例:状相変動)を発見したりする。このことによって、旧来のカテゴリーでは見逃されていた区別が発見されたり、新しい命題の成立する可能性が発見されたりする。

この手続きの特徴は、分析的かつ論理的なことである。このような厳密な方法を、精力的かつ系統的に社会学に持ち込んだのは氏がはじめてである。

二項対立から必ず議論を出発させるのは、論理性を重視したいからである、と私は想像する。その場合、対極として考えられている、非論理的なものとは、マルクス主義(特にその弁証法)であろう。(私の社

会学を、その根底において支えうる確かな思想的・哲学的基礎は、その頃隆盛を極めたマルクス主義にも実存主義にも分析哲学にも見出せなかった。(『自と情』ix頁) 弁証法は、三項図式から出発し、しかも形式論理に従わない。そうした威圧的なドグマの体系であるマルクス主義との格闘のなから、おそらくいまのべた①②③の方法は編みだされた。こうして生産されるカテゴリーの体系は、たしかに網羅的である。けれどもそこに、どれだけ実質的に新しい知見がもたらされるのだろうか。

網羅的枚挙がもたらす新しい知見は、いわゆる「構造的欠落」の発見である。要素の代数学的組み合わせとして当然考慮されているはずのものが、見落とされていた。そうした場合に、この方法は威力を発揮する。けれども、たかだかそこまでである。この方法がなにを発見できるかは、もともと、どれだけ対立軸を設定したかにかかっている。そうした対立軸が既存の概念にもとづくのなら、残念ながらそこには、本質的に新しい発見は何もない。

私が、たとえば「情報科学の構想」を読んで受ける印象は、これに近い。なぜならこの議論の素材となっているのは、すでに別々の学問分野で議論が尽くされた問題だからである。それを所与とする「代数学的組み合わせ」からは、いたずらに複雑なカテゴリーの体系が導かれるだけだ。(この論文のモチーフは……) 遺伝情報なる情報概念の概念が……) 自然言語としての情報概念にも接続しうる、新たな統一的世界像を啓示する何ものであるのか、という問いを自らに発したところに

一般的な上位概念をたてても、それとともになにかの法則性を主張できなければ、そのことの利得がない。用語系が、ただただ使いこなせないほど複雑になるだけだ。多くの場合に人びとはそう感じる。

実質的に新しい主張をするのでなければ、新しい概念を立てない。これが、研究上のルールではないだろうか。

* つぎに、第二の論点として、自己組織性について考えてみよう。

自己組織性について、吉田氏は長い考察を重ねてきているが、一九九〇年の論文「情報・情報処理・自己組織性」ではこのようにのべている。(システム)の秩序が、当該システムが保有する秩序プログラムによって規定され、システムの秩序の保持・変容も、当該の秩序プログラムの保持・変容に媒介されて実現する、といった特性は、生命の発生以降の進化段階にある存在に共通して認められるものであるが、これをシステムの自己組織性と呼ぶ(『自と情』一〇頁)。(私自身は……) 自己組織系の一般理論の、人間社会のレヴェルでの特殊ケースが社会学的構造機能理論であり、このパラダイムを社会学の一つの世代的および時代的要請に適用したものが、構造機能分析による変動論の構築であると捉えていた。(『情と自』iv頁) 吉田理論の場合、構造機能分析は発展的に解消して、自己組織性の理論に流れこむかたちになっている。

ところで、自己組織性がどの程度まできちんとした説明原理をそなえたモデルであるのかを、ここで考えたい。

かつて吉田ゼミの院生だった志田基与師氏は修士論文で、アローの一般可能性定理を応用し、つぎのようにのべた。一般に複数の機能要

始まる。……私が選んだ架橋の戦略は……一つは、これら二つの情報概念を矛盾なく包摂しうる情報語句の一般枠組みの構築という理論的方法であり、いま一つは、二つの情報概念を自然の進化の中のそれぞれの段階として位置づけるという経験的方法である。……私は情報現象の進化についての新たな理論枠組みの構築を要請されることにもなった。(『自と情』ii~iii頁) 前段は、先にのべた③の「上位概念を考える」ことあたり、後段は、同じく③の「カテゴリーの間の関係を発見する」ことにあたる。

「遺伝情報」と「自然言語としての情報」との上位概念として「情報」を考えるのは、まったく自由である。ただ、そのことに実質的な意味があるとすれば、それは、「遺伝情報」と「自然言語としての情報」の間に何か法則的な関連が発見できる場合である。そうした法則として考えられているのが「自然の進化」、すなわち、遺伝情報が進化をとげて人間の情報活動に変化したという事実である。

だがよく考えてみると、これは「事実」であろうか。たしかに、ごく初期の生物が進化して人間になった、とは言える、しかしそれは、遺伝情報という情報の形態が進化して人間の情報活動になったという主張(情報現象の進化)とは別のことだ。後者は言うなれば「比喩」であり、経験的事実の裏付けを伴わない「ドグマ」なのである。か

結局、情報概念の一般化によって、社会学や豊かになるという保証はない。確実に豊かになったのは、吉田理論の概念セットだけなのである。

ほかの社会学者が吉田理論を継承しにくいのは、ここに理由がある。

件をそなえたシステムが現実を「説明」するとすれば、同じことをただひとつの機能要件で説明できる。別な言い方をすれば、AGILのように複数の機能要件をそなえたシステムは、必ず論理的な矛盾を含んでしまう(複要件問題)。かりにこの矛盾を避けるため、ただひとつの機能要件をそなえたシステムだけを考えることにしたとしても、大きなシステム(たとえば社会システム)のなかに小さなシステム(たとえば個人)が含まれるようなモデルを想定する場合には、同様な問題を生ずる(複システム問題)。これは、当時の構造機能分析に向けられた批判であったが、同じ批判が、自己組織性の理論にも妥当することになる。

この問題を吉田氏は、自己組織システムの構造変容と結びつけて、自己組織性の理論のなかに位置づけようとする。一九八七年の論文「自己組織性と情報・情報処理」で、吉田氏はこうのべている。(自己組織システムの所与の共変構造と選択構造……) が共変|| 選択構造の存在、許容、安定問題を解決しえない場合には、情報変異と情報選択のメカニズムをつうじて、解の存在、許容、安定の三問題を解決しようとする構造へと変容する。(『情と自』二五九頁) 簡単に言うとは、選択構造(非機能要件)が解の存在を与えない(非モデル)のなかで理論値を決定できない|| 説明の前提が矛盾している(場合がある)ことを認めたいうえで、それが自己組織システムの特徴だとのべているのである。

同じ論文のなかで、吉田氏はこうも言う。(非自己組織パラダイム型の科学論における解の一義性ないし一意の解)にたいして、自己組織パラダイム型の科学論は解の自由度と試行錯誤によるその一義化を主張する……。……) システムの自由度とシシステムの試行錯誤

は、一つの対カテゴリーなのである。(「情と自」二六一頁) 自由度／試行錯誤の対カテゴリーは、一九七四年ころから唱えられ始めた自由発想／主体選択の対カテゴリーを、言い換えたものと考えればよいだろう。(「最高次の自己制御系、たとえば知的人間や計画社会の発展原理は、自由発想と主体選択」と定式化される。)(「主と所」二四四頁) 自己組織システムは、「自由発想と主体選択」と切っても切れないものなのである。

ここで私は、このような疑問を抱く。「自由発想」は、そもそもそれ自体、与件から説明できないものである。また「主体選択」も、説明できないプロセスによって解が一義的に導かれることをいう。したがって、「自由発想と主体選択」によって現象を説明しようとする時、「それ自体説明しようのないこと」によって「説明すべきこと」を説明するという奇妙な構造を、どうしても持たざるを得ない。

一般にどんな説明も、説明項のなかに、それ自体説明されない前提——公理や基本法則や基本概念——を含まざるを得ない。だがそれは、理論のごく一部分を占めるにすぎず、それさえ承認すれば、あとは説明のためのロジックが現象を説明する。それに対して「自由発想と主体選択」は、それ以外の説明のためのロジックを一切欠いているという点が違っている。こうした場合、人間や社会を自己組織システムであるか否かとして、それは単なるものの方の問題にすぎないことになり、認識上の利得は特になく、と言われても仕方がない。

*

第三の論点として、吉田理論の応用問題について。その中身は多岐に

所「一七九頁」といった、社会形態の文化的変異を考察するための仮説に活かされている。GモデルとIモデルは、これまでに提案された同じ目的を持つモデルのなかで、簡潔で論理的で有用なものの一つだと思ふ。

吉田理論の周到な概念構成が具体的な問題に新しい切り口を示したもうひとつの例として、フェミニズムがある。「性別—脱性別文化形成の基軸理論をめぐって」(一九八八)で吉田氏は、(「性差別の開かれた循環構造」)(「主と所」二〇〇頁)をかたちづくる六つの仮説を列挙し、それらがつきつきに他を産出して、結果的に性差別の基本構造を維持していることを示唆した。

これ以外の個別問題でも、吉田理論は多彩な応用可能性を示している。私が個人的にもっとも感心しているエレガントな論文は、一九七四年(第II期)の「社会システム論における情報—資源処理パラダイムの構想」(「情と自」所収)だが、一般理論への志向をむしろ押さえ気味に、問題の具体性を大切に仕事を進めている第III期の吉田理論のほうが、かえって展開力があるような気がする。

*

これほど一般性をもち、しかもこれほど熱心に読まれた日本の社会理論は、吉田理論をおいてないだろう。氏の三部作が出版されたことで、吉田理論は、同時代の学者やゼミの教え子たちばかりでなく、もっと若い世代の、さらに多くの読者に読みつかれるに違いない。そして、次代、次々代の論客たちに継承されていくことを願う。

わたっているので、いくつかテーマを絞ろう。

まず、所有論について。七〇年代に吉田氏が試みた所有論は、人間が対象をコントロールする能力をただちに所有とみなそうというもので、概念が広すぎ、所有現象の核心を突いたものとは言えなかった。後年氏はそのことを認め、一九八一年の「所有構造の理論」では、(「かつての筆者の試みのように所有概念を制御能一般と等置すれば、これはまた広義にすぎ、分節力を失うという批判は避けがたいであろう」)(「主と所」三四二頁)とのべている。そして所有は、社会関係を經由した対象のコントロールに限定して概念化されるようになった。具体的には(「制御能の帰属と内容に関する……四つの視点……」に基づいて、科学的所有概念を多次元的に構成する)(「主と所」三四二頁)。四つの視点(次元)とは、(1)完全排他的／不完全排他的、(2)制御能領域が3段階／2段階、(3)制御能局面的採択性／拒否性、(4)制御能水準の上級性／中級性、の四つである。すべてにわたって前者なら(「所有」)、ひとつでも後者であれば(「準所有」)とよぶ。所有概念の常識に即した、妥当な概念セットであると思う。

つぎに、主体分析と自他分節について。「主体性の分析のための一連の視角」(一九八〇)や「人間—社会システムのIモデルとGモデル」(一九八二)でもっとも興味ぶかい概念は、当体／脱当体、の概念対である。この概念によって、自己組織システムが自己性を構成する範囲とパターンが、多重に分析できるようになった。そのことは、(「日本社会の集団志向性」)と(「欧米社会の個人志向性」)の理念的諸特性を記述・説明しうる理論モデルとして……のGモデルとIモデル)(「主と

〈文献〉

吉田民人「自己組織性の情報科学」新曜社、一九九〇年、二九六頁

同「情報と自己組織性の理論」東京大学出版会、一九九〇年、二九五頁

同「主体性と所有構造の理論」東京大学出版会、一九九一年、三七三頁

(東京工業大学助教授)